幕末維新期に活躍した振徳堂の儒者たち

飫肥城下町保存会　学芸員
長　友　禎　治

目次

はじめに
一　新たに分かった長倉訒の実像
二　小倉処平
1　幼少期から幕末までの略伝
2　長崎における小倉処平の働き
3　貢進生制度と小倉処平
4　ヨーロッパ留学
5　佐賀の乱と小倉処平
6　小倉処平と陸奥宗光
7　西南戦争に身を投じた小倉処平
三　雲井龍雄と飫肥藩の政治動向
1　雲井龍雄の略伝
2　雲井龍雄の出身藩、米沢藩について
3　雲井龍雄と飫肥藩
四　平与市
五　「天満屋事件」に遭遇した飫肥藩士（長倉訒・平与市）
六　平トミ
七　稲津済
1　稲津済の略伝
2　江戸遊学
3　文久年間の済
4　兵制改革
5　戊辰戦争と飫肥藩
6　雲井龍雄と稲津済
7　貢士後の稲津済
8　晩年の稲津済
9　稲津済の妻について
八　史料編
1　小倉処平史料　①～③
2　平与市史料
3　稲津済史料
4　年表

はじめに

小村寿太郎侯奉賛会の主催による小村寿太郎侯顕彰展が毎年、国際交流センター小村記念館において開催されている。平成二十年度は「小村寿太郎侯と振徳堂蔵書」と題して、小村寿太郎が藩校・振徳堂に在校していたころの蔵書を公開した。主な展示物は、日本の歴史本として、『大日本史』、『常山紀談』、『読史余論』、『古事記伝』、中国や朝鮮史では、『資治通鑑』、『東国通鑑』、『史記評林』、『十八史略』、幕末の時事問題に関するものとして、『海外異伝』、『如蘭集』、『爛枯柴』、都城県に関するものとして『古文考経（都城県蔵版）』などである。何れも振徳堂の蔵書印が捺されていて、振徳堂の学生たちもこれらの蔵書などから多くの知識を得たことであろう。現存する書籍は僅かであるが、当時の時代風潮を感じ取れる書物群である。

それにしても、九州の南端に位置する小藩飫肥から、何故日本外交に名を残す小村寿太郎が誕生したのか、寿太郎が幼年期を過ごした飫肥の教育はどのようなものであったのか興味が尽きない。そこには寿太郎を取り巻く人材、藩校・振徳堂の蔵書など多くの要素が影響していたことは容易に想像できる。寿太郎自身も「英雄はめったに出るものではない、教育で育てられ足腰がたってから飛ぶなり跳ねるなりするがよい。」と述べている。

小村寿太郎は稀に見る優秀な人物であったことは間違いなく、それにもまして寿太郎の能力をさらに伸ばす要素が飫肥城下にはあったと私は思う。その環境の中で寿太郎が成長したことは偶然ではなく、飫肥藩が成立した時の政治環境が永い時間をかけて独特の藩風を生み出し、さらに先人たちの努力もあって文教面を充実させた。小村家は下級藩士ではあったが、藩にとっては重要な本町別当（商業地を担当）を世襲した家で、寿太郎の周辺には安井息軒の薫陶を受けた人物がいた。今回紹介する長倉訒・小倉処平兄弟、稲津済のように、幕末維新に際して小藩を代表して混迷する政局に立ち向かった者たちがいた。

今回の原稿は、平成十九年度の小村寿太郎侯顕彰展「小村寿太郎と藩校振徳堂の儒者たち」で示した解説文に手を加えたものである。このように発表の場をいただいたにもかかわらず、もうすこし内容を深めたかったのだが、その余裕もなく少々の修正に終わってしまった。それでも、政治面・教育面で活躍した振徳堂の儒者たちの知られていなかった活躍を紹介することで、間接的ながら寿太郎が誠の心を信条として、なぜ大きな業績を残せたかを感じ取っていただけるのではないかと思い、書き綴った次第である。

一　新たに分かった長倉訒（小倉処平の実兄）の実像

長倉訒の写真（『西南記伝』黒竜会遍）

長倉訒（天保十一年《一八四〇》～明治十六年《一八八三》）の伝記については、図師幸憲氏の『飫肥藩先人伝』（昭和五十一年発行）などに掲載されていたが、その内容は明治三年（一八七〇）十一月に飫肥藩大属に任命されてから西南戦争までの記述にとどまっていた。おそらく、訒と名乗る前の旧名が知られていなかったため、幕末維新期の事歴が見落されてきたものと思われる。

今回、訒の縁者でもある平部嶠南の『嶠南日誌』と『六鄰荘日誌』を詳しく読み解いてみたところ、これらの日誌に登場する「長

倉徳助」や「長倉亨（『六鄰荘日誌』明治二年十月十五日を参照）」が訒の旧名であることが分かり、幕末維新期に京都で飫肥藩探索方として活躍していた人物と同一人物であることが判明した。訒は二十代後半まで「徳助」（明治二年頃まで）と名乗り、次に「亨」（明治二年十一月頃）と称した後、訒（明治三年頃改名）と改名している。本論文中では煩雑さを避けるため長倉訒で表記する。

長倉訒は飫肥藩士・長倉喜太郎の長男として天保十一年（一八四〇）に飫肥で生まれた。弟には「飫肥西郷」の異名をとる小倉処平がいる。誕生地については記録によってまちまちで「西郷いくさ（未刊行、小村精一著）」の中では飫肥の「山川」と記されているが、『西南伝記』によると「飫肥楠原」の生まれとある。また、天保十三年頃の飫肥城下図（日南市所蔵）では飫肥城二重木戸口（飫肥小学校正門南隣）に父喜太郎の邸が記されていて、訒や処平が飫肥のどこで生まれたかについては軽率に断定できない。

安政四年（一八五七）一月、訒（十八歳）は、学校係主事を皮切りに、振徳堂に約十年間勤めた。この間、順調に昇進して同六年から句読師となり、文久三年（一八六三）には寮長も兼務、翌元治元年（一八六四）六月には助教に就任している。訒は、落合雙石（飫肥藩士・漢詩人）に詩文を学び、弁論に長けていたという。また、人柄は温良（穏かで素直）で雅量（人を受け入れるおおらかな心）であった。訒が人に接するとき、赤心（嘘いつわりのない、ありのままの心）で接し、至誠（きわめて誠実なこと）に対応したので、人は訒によく従ったという（『西南伝記』）。

慶応二年（一八六六）二月には江戸留学のため助教を辞め、同年五月、伊東久五郎・中村太平・平島隆助・河野洞蔵らと共に安井息軒（飫肥藩出身の儒学者）の三計塾に入門している。この時、訒は二十七歳、初めて諸国から集まった書生たちと交流する機会をもった。江戸遊学を終えた訒は、京都留守居役に任命され、混迷を続ける京都外交を担当することになった。京都では甲村休五（後の平与市）と共に諸藩の有志と交流を重ね、時には白刃の下をくぐることもあった。

明治政府が成立して、明治元年四月に帰藩した訒（二十九歳）は、一旦振徳堂の助教に復職（八月二十三日～十一月三日）した後、相談中に任命され藩政に参画した。廃藩置県後も飫肥県・都城県飫肥出張所・宮崎県の官員を歴任しており、明治九年に宮崎県が鹿児島県に併合された際には藁谷英孝・園田行慎らと残務取扱を務めた。西南戦争では飫肥隊の編成に尽力し、さらに大山鹿児島県令よりの依頼をうけて、西郷軍が決起したことを各県に知らせる役目を務めた。しかし、久留米（福岡県）で拘束され、懲役七年を求刑された。これは実戦に加わった将校よりも重く、飫肥隊を率いた川崎新五郎と伊東直記と同じ刑期であった。訒が大山から任された役目がいかに重要であったかがうかがえる。それでも明治十三年には赦され、その能力を認められて農商務省御用掛となった。明治十五年に東北地方を巡視中に病に倒れ、翌年東京において死去した。享年四十四歳。

二　小倉処平　弘化三年（一八四六）～明治十年（一八七七）

小倉処平の写真（日南市所蔵）

1　幼少期から幕末までの略伝

小倉処平は、明治の外交官小村寿太郎を世に送り出した人物、西南戦争で飫肥隊を率いて活躍した人物として知られている。